



TITLE:

京都大学言語学懇話会 2003年度活動報告

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学言語学懇話会 2003年度活動報告. 京都大学言語学研究 2003, 22: 391-396

ISSUE DATE:

2003-12-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/87825>

RIGHT:

京都大学言語学懇話会
2003 年度活動報告

第 61 回例会

2003 年 4 月 12 日(土) 午後 1 時 30 分～4 時 45 分

京大会館 102 号室

研究発表

ナイル諸語における「単数」形について

稗田 乃 (大阪外国語大学)

中央アジア出土チベット語木簡

武内 紹人 (神戸市外国語大学)

第 62 回例会

2003 年 7 月 12 日 (土) 午後 1 時 30 分～4 時 45 分

京大会館 102 号室

研究発表

スライアモン・セイリッシュ語のクリティックについて

渡辺 己 (香川大学)

中期チュルク語における語順 ― 散文文体の成立という観点から ―

菅原 睦 (東京外国語大学)

ナイル諸語における「単数(Singulative)」について

稗田 乃

本発表では、ナイル諸語を構成する3つの下位言語群、西ナイル方言、東ナイル方言、南ナイル方言のすべてが名詞形態論において「単数(Singulative)」形の形成法をもっていることを明らかにし、また、「単数(Singulative)」形の形成法は、ナイル祖語に溯ることができることを考察した。

西ナイル方言において、名詞の「単数(Singulative)」形は、名詞語幹に接尾辞-Oが接辞されて形成された。また、母音 O に先行する歯茎鼻音 n をともなう接尾辞-nO があった。恐らく、接尾辞-O と接尾辞-nO は、1つの接尾辞の異形態と考えられるが、結論をくだすにはさらなる研究が必要であろう。接尾辞の初頭位置にある鼻音は、先行する語幹末に位置する子音を鼻音化した。

東ナイル方言において、「単数(Singulative)」形を形成する方法は2つ存在した。1つは、語幹に接尾辞-A/o を接辞するやり方であり、もう1つは、語幹に語幹形成辞-Ak/-ok を接辞し、さらに、その後ろに「単数(Singulative)」形をつくる接尾辞-I/-I を接辞するやり方である。このとき軟口蓋子音 k は、母音間で歯茎鼻音 n に変化する。

南ナイル方言において、「単数(Singulative)」形を形成する接尾辞は、-(y)a:n と -i:n の2つが観察される。しかし、接尾辞-i:n が接辞された形式は、集合的に用いられる複数形の可能性がある。

「単数(Singulative)」形の形成法がナイル祖語に溯って存在したことを、再構成例を1例、提示して考察しよう。

「牛、家畜」

テソ語 (東方言)

ナンディ語 (南方言) シルク語 (西方言)

A-kI-tEng' (sg.) / A-kI-tUk (pl.) tany (sg.) / tuc (pl.) dhyang' (sg.) / dhok (pl.)
Singulative: PN *(kwI)-r2Eg-Ak-I > (kwI)-r2Eg-An-I > (kwI)-r2Eg-nI > (kwI)-r2Eng'-I > (kwI)-r2Eng'

南方言は、軟口蓋鼻音 ng' を高母音の前で硬口蓋鼻音 ny に変化させた。

「牛、家畜」を意味する名詞は、3つの方言群すべてが「単数(Singulative)」形をつくる。しかし、「人」を意味する名詞は、東方言と西方言が「単数(Singulative)」形をつくるが、南方言が「単数(Singulative)」形をつくらない。このように同起源の形式と考えられるものが、各方言間で「単数(Singulative)」であったり、そうでなかったりすることに注目しなければならない。

(ひえだ おさむ)

中央アジア出土チベット語木簡

武内 紹人

中央アジアから出土した古チベット語文書のなかには、紙文書とともに大量の木簡が含まれていることはよく知られている。木簡は、敦煌石窟ではなくシルクロード南道に沿ったマザールターグ(コータン地域)やミーラーン(ロプ地域)遺跡から多く出土している。それらは、当時のチベットによる中央アジア支配の実態や言語・社会状況を映し出す重要な資料であることは言うまでもない。

従来の研究としては、F.W. Thomas がスタイン蒐集の木簡の内 390 点のテキストと訳を出版(TLTD 2)、Vorob'ev-Desjatovskij がマールフ蒐集品の研究を公刊した(1953, 1953a, 1955)。その後、王堯と陳踐が新疆維吾爾自治区博物館所蔵の木簡 78 点(骨1点を含む)を、Thomas および Vorob'ev-Desjatovskij が公刊したものと併せて出版した(1986)。しかし、スタインコレクションだけで、実際には 2,300 点近い木簡があり、その大半は未発表で存在すら知られていなかった。さらに従来の研究では、木簡をその形状から分析し、テキスト解読と併せて、その用途や内容を総合的に考察する「木簡学的」研究はなかった。

チベット語木簡は、イギリス(ロンドン)、ロシア(セントペテルスブルグ)、ドイツ(ベルリン)、中国各地に所蔵されているが、最大のコレクションは大英図書館所蔵のスタインコレクションである。筆者は、イギリス、ロシア、ドイツ所蔵のチベット語木簡の調査依頼をうけ、まずスタインコレクションを当面の研究対象として、カタログ作成とデータベース化をはじめた。

カタログ・データベース化の準備としてつぎの3つの作業過程をおこなった。

- 1) すべてのチベット語木簡に、あらたに統一番号(IOL Tib N ナンバー)を賦す。
 - 2) すべての木簡に必要な修復を加え、それらを統一番号に従って、新しい箱に入れ直す。
 - 3) すべての木簡のデジタル映像を撮影する。
- 1) については、前のチベット文献キュレーターであった Ulrich Pagel 氏、2) については、修復部の Robert Duke 氏、3) については、IDP の Sam van Schaik 氏が中心となり、筆者が協力。1), 2)は、2000 年に、3)は、2002 年末に一応の作業を終えた。

つぎに木簡の本格的な調査を始めるにあたって、日本における木簡研究の専門家である館野和己氏(奈良女子大学教授)の協力を得て、形状の分析と日本の木簡との比較などを担当して貰った。チベット語木簡の形状面からの分析はこれまで行われたことがなく、今回の館野氏の分析によってチベット語木簡の特徴がはじめて明らかになった。2000～2002 年に、筆者と館野氏は大英図書館において 3 度の調査を行った。その成果はつぎの諸点にまとめられる。

- 1) すべての木簡の統一番号とサイトナンバーを確定した。
- 2) 木簡を形状と内容から分類する基準を確立し、すべての木簡をそれに基づいて分類した。
- 3) ほぼすべての木簡のテキストをデータベース化した。
- 4) 形状についての情報もデータベース化した。
- 5) テキストと形状、両面の分析から、木簡の用途と使用実態がかなり明らかになった。
- 6) 上記の分析から、チベットの中央アジア統治の実態の解明が進んだ。

本発表では、上記の調査にもとづいてチベット語木簡の概略を紹介した。

(たけうち つぐひと)

スライアモン・セイリッシュ語のクリティックについて

渡辺 己

北アメリカ北西海岸で話されているスライアモン語（セイリッシュ語族）におけるクリティックと接辞は以下の三つの基準によって、およその区別ができると考えられる。すなわち、（１）接辞はそれ特有の不規則な形態音韻的变化を引き起こすことがあるが、クリティックについてはそういうことはない、（２）クリティックはホストの前に付くこともうしろに付くこともできる（「モバイル」である）が、接辞には現われる位置についてそのような自由はない、そして（３）言いよどみを表わす小詞はクリティックとそのホストの語の間には起こりうるが、接辞と語幹、あるいは接辞と接辞の間には起こりえない。この三つの基準はこのままですべてのクリティックと接辞に当てはまるわけではないが、一定のクリティックと接辞が同定できれば、他の形態素はそれらと共に起した時の位置によって同定できると考えられる。すなわちここでは、ある形態素がすでに同定されている接辞と語幹の間に現われれば、それは接辞であるとし、一方、ある形態素がすでに同定されているクリティックよりも語から離れて現われれば、それはクリティックであるとする。

注意すべきなのは、接辞には、あたかもクリティックのように節のなかでいわゆる第二位置に常に現われるものがあることである（cf. Wackernagel's Law）。そこで、接辞にかんして、そのように第二位置に常に現われるもの、すなわち節の最初の語（それが述部であれ、そうではないものであれ）に常に付くもの（'edge-positioned'）、そしてそれとは異なり、述部が節の最初に位置しない場合でも常に述部に付くもの（'predicate-positioned'）の区別を記述する必要がある。ただし、すべての接辞がこのどちらかに排他的に分かれるわけではない。なかには両方の位置に現われうるものもあり、それらについてはそれを形態統語的振る舞いとして記述する必要がある。

（わたなべ おのれ）

中期チュルク語における語順 ―散文文体の確立という観点から―

菅原 睦

トルコ語をはじめとするチュルク諸語は、類型論上 SOV、Modifier・Head の基本語順をもつ言語として知られるが、実際の発話においてはしばしばこの基本語順からの逸脱が見られる。トルコ語の語順に関する近年の研究は、このような語順のヴァリエントを、口語特に'unplanned speech'に特徴的な現象として位置づけ、談話的な要因からの説明を試みている。一方チュルク諸語の歴史を見るならば、漢語、ラテン語、アラビア語といった言語からの翻訳に際して、原文の語順をそのまま保持した、それゆえチュルク語としては特異な語順をもつ文献が残されていることが注目される。

発表では、談話的に条件付けられる口語的な語順と、翻訳に由来する外来構文という2つの要素が、14－15世紀の中央アジアチュルク語散文文献においてどのように現れているかを検討することにより、この時代のチュルク語散文文体の成立・発展過程の一面を描き出そうとした。

まずいわゆるホラズム・トルコ語による散文作品『預言者たちの物語』(ラブグーズィー、1310年)、『天国への道』(1350年頃)、『昇天の書』(1436/37年筆写)の語順を分析し、上で触れた現代トルコ語口語の語順と類似した傾向が認められることを示した。具体的には、前提となっている要素の後置や補足的な修飾要素の後置といった現象である。このことから、ホラズム・トルコ語散文作品の言語が、語順に関してある程度まで当時の口語の特徴を反映していると考えることができる。このことは同時に、この言語が文章語の発展の初期の段階にあったことを示すものでもある。

これに対して、15世紀後半のチャガタイ語散文作品においては、このような口語的な語順よりもむしろペルシア語構文のなぞりがしばしば目に付く。また押韻散文のように、文体上の目的のために特定の語順が選択されている例も見出される。このように、外来構文の影響を強く受けた独自の文体を備えるに至ったことが、古典時代(15世紀後半)チャガタイ語散文の重要な特徴のひとつであると言える。

発表ではさらに、ともにペルシア語からの翻訳による2つの散文作品『友愛のそよ風』(ナヴァーイー、1495/96年。原作はジャーミー『親交の息吹』)と『聖者列伝』(訳者不明、1436/37年筆写。原作はアッターール『聖者列伝』)の文体を比較した。神秘主義者の評伝という同じジャンルに属するこれら両作品の比較は、翻訳と散文文体の確立との関係を考えるための重要な手がかりを提供するものであることを指摘した。

(すがはら むつみ)